

九条の樹 55

2015年5月



東久留米「九条の会」ニュース

発行：東久留米「九条の会」

代表者 古田足日・連絡先 鈴木Tel.042-473-9489

http://members3.jcom.home.ne.jp/higashikurume9/

メール：higashikurume9@jcom.home.ne.jp

日本国憲法 第9条

- ①日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。
- ②前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

九条「こわす」「安保法制」

東久留米九条の会十周年にあたって

占領地に日の丸を立てる

「東久留米九条の会」ができて今年で十年目に当たります。代表の児童文学者、古田足日さんは昨年亡くされましたが、最後まで安倍政権の暴走を心配していました。

古田さんは少年期、学校で教室に中国の地図を貼り、そこに書かれた中国の都市を日本軍が占領すると、その地図の都市に日の丸を立てて、みんなで喜んだと話していました。古田さんは、当時の自分は、日の丸の立った都市に実際は中国の人たちや子どもたちがいたこと、その人たちがどういう状況であったかという話は、全く想像できなかったと語っていました。そのような想像力をもつ子どもを育てることが、平和を作るこ

とになると、考えるようになったとも述べています。

平和をつくる想像力

古田さんの考えに習うなら、今私たちが想像力を発揮して考えるべきことがあります。

日本の自衛隊が、海外に武器などをもって出て行ったとき、入ってこられた国の人たちの立場で考えることです。彼らはどう思うのかと。立場を変えれば、中国や韓国の軍隊が日本の領土に武器を持って入ってきたらどう感じるでしょう。小さな島に漁船や軍艦が近づいただけで大騒ぎになるのですから。外国の軍隊が本州などに続々上陸してきたらどうでしょう。日本人は激怒してたちまち戦争になるでしょう。

戦後の日本もアメリカが来たら

男は皆殺され女は暴行されるのはと恐れていました。

外国に軍隊が出るとはそういうことでしよう。そういう法律を今、政府は作るうというのです。

「戦争法」はストップを

安倍政権が成立をめざす「安保法制」はまさに「戦争法」です。世界の平和にとつても、日本国民の幸福にも、まったく、逆行するものだと思います。

憲法九条を否定する今回の「安保法制」を、市民が力を合わせて、阻止することを呼びかけます。



東久留米の教育と安倍政権



西部九条の会 草刈智のぶ

東久留米市の教育に大きな動きがありました。しかもそれが安倍政権の政策と連動しているのが明らかだけに教育の危機を感じています。

大津市の中学生いじめ自殺事件などをきっかけに、2014年6月に地方教育行政法（地教行法）改正案が国会で可決・成立し、新教育委員会制度が今年の4月から導入されました。新制度で大きく変わったのは次の2つです。一つは市長が任命する新教育長が教育委員会の責任者になる。もう一つは、市長が主宰する「総合教育会議」を新たに設置するということです。教育に市長の権限を反映できるようにするというのが特徴です。

この新教育委員会制度の導入

に東久留米市は非常に積極的に進みます。新教育委員会制度は4月に施行になりましたが、その施行については旧教育長の任期が満了するまで在職してよいという移行措置があります。旧教育長は3年の任期が残っていたのですが、3月議会で辞職をし、新教育長として任命されました。議会では「なぜそんなに急ぐのか」と新制度への移行を急ぐ意味を問う討論が続きましたが、市は今後の教育委員会をどう考えていくかなどを説明することなく、「法改正にともなうてやる」と形式的な答弁に終始しました。そして新教育長の任命と総合教育会議の設置という2つの改革を迅速にやっしまいました。

昨年9月、教育委員会は全国学力テストの結果公表を決めました。特に東京都内では東久留米市だけが学校別の公表を決めたので、教育関係者をはじめ市民からも「学校の序列化や競争を激化させる可能性があるのでは

はないか」と不安や心配の声が上がりました。特に全国平均点に満たない子どもを割合を公表したことは子どもや保護者に競争意識をおおるだけで、子どもの学力向上に結びつくとは考えられません。

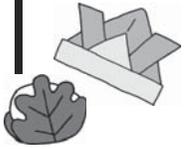
並木市長は昨年9月に「学力テストの公表について」、11月には「いじめ問題について」に臨時教育委員会に出席し、市長としての意見を述べています。歴代の市長は教育委員会に出席することはありませんでした。それは、そもそも教育委員会は、教育が政治に左右された戦前の反省から、1948年「政治的中立性の確保」、「方針の継続性・安定性の確保」、「地域の人たちの参加で住民の意向を反映」するという3つの大原則が掲げられて作られたものだったからです。これまでの教育委員会と市長との関係を、一気に新教育委員会制度で変えていきたいという意気込みがここに見られます。

学力テストの結果公表や新教育委員会制度の導入は、安倍政権の教育改革の柱、競争できる国づくりのためにまい進する政権の姿そのものです。それをどこよりも早く市政に反映させようとしている事実をしつかりとらえておく必要があります。そして何よりも子どもが主人公にならない教育改革は許されないと市民が声をあげなくてはなりません。子どもの声や保護者の願い、保育や教育に携わる専門家の声が十分に反映される教育改革こそが望まれます。

8月には2016年から4年間使われる中学校の教科書採択が行われます。ここにも政権の力が大きく影響しています。子どもの未来を守るため、教科書採択が公正な立場で行われることを願っています。



二本の柱



キリスト者九条の会 岸亮夫

2014年5月30日と6月8日に副代表と代表の二本の柱が相次いで亡くなられた。恐らくお二人とも今の状況を気になさりながら往かれたことでしょう。

そこで東久留米「九条の会」のお二人を偲んで、書かれた文章を読み直してみたいと思います。古田さんは児童文学者、佐野さんは出版社に長年勤務という経歴でしたから、九条の樹によく書いてくださいました。九条の樹は発足と共に発行されました。お二人に見る論調には終始一貫した姿勢が感じられます。昨今のこうした主張にはその都合によって変更調節がよく見られますが、そうしたところがまったく見られませんか。

○2005年2月20日、発足の日に市民プラザ屋内広場で開かれた、「みんなで東久留米「九条の会」をつくる集い」での古田足日さんと小森陽一さんの講演から、古田さんのお話を紹介しま

しよう。

―戦争当時少年兵だった文学教育、平和教育に熱心な石上正夫という方の「小学1年生から天皇のため国のため命を惜しまず戦えと教育されて…」つまり「愛国心」を植えつけられ「忠君愛国」こそ日本国民の生きる道だという価値観を身につけて・・・天皇と祖国日本のために死のうと思ひ込んでいました。忠君は別にして「愛国」を大きな価値のあるものとして強要していこうという力が堂々と動いている。憲法と教育基本法改悪に反対し、孫の世代に再び少年の死者を出さないため、つらい年月を孫たちに体験させたくない。―と結んでいます。

○2007年8月に発行された「九条の樹」では、佐野さんが「いまこそ『民論を興そう』と書いています。

―今回の選挙は政権与党に厳しい審判を下し、野党が歴史的勝利を得た。小泉前首相が明示した改憲路線を安倍首相は「私が実現する」と引継ぎ改憲の手続法、教育基本法を改悪し「戦後レジームの打破」を叫び「海外で戦争する国」

にし「弱肉強食の経済社会作り」に邁進している。多くの人が戦前の状況に似て来たと不安感をもってこの政権にストップをかけた。ここにこの選挙の意味がある。私たちの進むべき道は明確です。世界の先駆けである日本国憲法を守り、平和で民主的な日本を作ることです。民主党に力を与えたが、この党も改憲を掲げている。私たちが自身が一歩踏み出して変わって行かなければならない。

百年前に島崎藤村は「本当に自分らが新しくなることが出来れば、古いものはすでに壊れている。来るべき時代のために仕度するということに他ならない」（千曲川スケッチ）と言っています。今の時代に生活実感を踏まえて草の根から世論を「民論」として起こしていきましょう。民論を盛んにしてこそ憲法が生かされ民主主義が定着するでしょう。東久留米「九条の会」は市民のみならずと広く連帯して九条を守るために力を尽くします。―

○2012年1月発行「九条の樹」は「子どもといっしょに楽しみ考える創作で飛躍したい」

と古田さんが豊富を語ってくださいている。新しい評論集を出して意気軒昂なところを見せてくださってもいい。初めの評論集（日本児童文学者協会新人賞受賞）から50年余りたつのを機に振り返ろうと思つたそうです。タイトルは「現代児童文学を問いつけて」その中に「新しい戦争児童文学を求めろ」という書き下しを一編入れたのだが、日本のアジア侵略、加害の事実、など植民地支配を振り返ってきちんと書こうと主張した論です。

―支配への抵抗には朝鮮に三一独立運動があり、台湾には霧社事件というのがあり、日本はその弾圧に毒ガスを使い、飛行機を使って日中戦争の予告編のようなことをやっている。

ぼくは84歳、この後生きている間に物語を子どもと一緒に楽しむというが、創作をやりたい。井上ひさしはそのモットーとして「難しいことを優しく、深いことをおもしろく書く」と言っています。井上さんは児童文学者ではありませんが、児童文学ってのはそういうものです。子どもと一緒に考え

ていく、そんな物語を書いていきたい。今までより一步飛躍したいですね。――

○ 2010年5月発行「九条の樹」に佐野さんは「締め出すな民の声」と題して原稿を寄せています。

――その当時民主党政権が80名の定数削減を打ち出し、むだ遣いをなくす”ことを理由にしている。議員の数は多すぎるのでしょか。主な外国と比べても議員定数は少ないのです。

議会 120年の歴史を振り返って見るのも参考になります。

1890年に第1回の総選挙が行われ、議員定数300名、当時の総人口は3800万人で今の3分の1でした。1920年に第1回国勢調査が行われ、全人口は5600万人、その年総選挙があり、定数を464名に増やし3円以上の納税者が有権者になる。1925年に納税資格を撤廃して男子普通選挙法が国会通過し1928年から実施。定数はそのまま、因みに東久留米の村議は12名から18名に増員しています。

1945年敗戦の年11月、翌年

に総選挙を行うために人口調査をし、7199万8104人と確認された。総選挙法を改正し婦人参政権が認められ選挙権、被選挙権もそれぞれ5歳ずつ下げられた。議員定数は少しずつ増え、1980年代には512名にまで増えていました。

ところが1994年、財界4団体の首脳が、小選挙区制法案の今国会成立を主張。小選挙区比例代表制が導入され、議員定数は500（比例200、小選挙区300）に縮減。2000年にさらに20名削減され比例が180名に、さらに80名も削減するというのでは、100年前に逆戻りです。比例定数削減は改憲反対や消費税増税の民意を国会から締め出そうとしているのです。近代百余年は国民の参政権拡大に努力してきた歴史です。それを受け継ぐ私たちは民主主義、国民主権を後退させることを断じて許してはなりません。――

○ 2014年1月発行の「九条の樹」で古田さんは「リハビリやマッサージ、発声練習に歯医者さん」などが訪問してくれて毎日

が忙しいとお元気です。

――僕たちが生きた時代は戦争の時代だった。僕自身軍国少年だった。同じことを安倍首相はやるうとしている。愛国心という言葉に言っている。どれだけその言葉に傷つけられてきたか。これまで憲法九条が守られて来たのは、国民の戦争体験があったからだと思います。その体験者がいなくなると、それがなぜそうなったのかと云う所まで考えて来なかった。戦後になり「たまされていた」という言葉が使われた。僕はその言葉が嫌いでした。「だから自分は悪くなかった」というのはおかしいと思う。

田中正造という人がいて天皇に直訴した人です。足尾銅山鉱毒に反対する事から始まって渡良瀬遊水地を国が作るうとする。それは谷中村が水没してしまふ。その事に反対を続けていくのです。田中正造は「国とは何か」ということを言っている。「国とは国民じゃないか」と。正造の本はだいたい出ていて、子ども向けの著書も出ている。学校や図書館でも普及してほしい。

秘密保護法については、僕たちも会でも声明を出そうかと言っているのですが、僕は今電話も出来ない状態で出来ずにいるのですが、僕のように上げたくても上げられない人もいます。今後のために、今黙っている人、迷っている人も声を出していくことが大事じゃないでしょうか。

三十年来考えてきた企画として戦争児童文学という長編小説集を出そうと考え、韓国に三一独立運動というのがあります。韓国では知られていても日本の子どもたちは知らない。きちんとした長編児童小説として書いて、朝鮮韓国を差別してきた歴史をきちんと書く、それを考えてきたのです。短編はうまくいったのですが、長編集が進むかどうか、人に書けかけと言って自分も書かなければならないんです。――

佐野さん、古田さんの書き記されたなかから、かいつまんでここに載せてみました。お二人の見識ある文章とお人柄が偲ばれます。



九条をまもる草の根の活動を強めよう

— 九条の会全国交流集会 — 開かれる —

安倍政権の国民を無視し「戦争する国」づくりへの暴走に對抗する「憲法九条をまもれ」の草の根の運動を強化するための「九条の会全国交流集会」が3月15日に行われました。

当初の予定をこえる参加者があり、変更した大きな会場も満員、多くのメディアもきていました。なかでも韓国メディアは、参加者の声を活発に取材、関心の高さを感じました。

集会は、九条の会の呼びかけ人9人のうち集会へ参加できる澤地久枝さんと大江健三郎さんの二人が挨拶されました。澤地さんは「軍事大国をめざしている一部の政治家がアメリカと手を組んでいる。過去の過ちも軍事大国になって大儲けする人たちによっておこされた。人々が手を組んで何としてもこの窮地をのりこえよう」。大江さんは

「ノーベル平和賞受賞の元大統領との会話で、『いま、世界で東アジアの不安定さが危惧されているが、日本での九条の会の活動に関心を寄せ、希望をかけている』という内容を紹介、東アジアの平和のためには、私たちの運動にかかっている」と訴えられました。

この後、渡辺治さんから「情勢について」の話し、小森事務局長から「結成10年の私たち「九条の会」の真価が問われる正念場です。「戦争法制」を絶対に許さない行動が必要。活動を休んでいる「九条の会」にも声をかけ、地域で協力して行動を起こし何としても「戦争法制」を阻止しよう」と呼びかけられました。各地の「九条の会」の参加者34名が運動を進める発言があり、参加者の決意を固めました。（西部九条の会 大野英男）

◆お知らせ

●東久留米「九条の会」10周年のつどい

未来を担う子どもや孫やひ孫たちにずっと平和憲法を引き継ぎたい、今私たちにできることは何か、いっしょに考え力を合わせましょう。

第一部では沖繩出身のファミリーバンド、「カーミーズ」が平和への想いを唄います。また、東久留米の教科書採択についての報告も予定しています。

第二部で、講師に「九条の会」事務局長の小森陽一さんをお迎えし、お話をうかがいます。

日・6月27日(土)
時・午後1時30分開演

於・まろにえホール
(開場は午後1時)

(東久留米生市立涯学習センター)
チケットは

前売500円(当日700円)
学生・障がい者は無料です
お誘い合わせのうえ、ぜひ
ご参加ください!

●西部九条の会

「戦争する国」づくりに
反対する

戦後70年見学会

「西部九条の会」では、戦争へ進む道、戦時中の暮らし、そして戦争がもたらした最大の犯罪、原爆投下など、埼玉平和資料館と丸木美術館をとおして、その実態を学び、安倍政権がすすめる「戦争への道」に強く反対していきたいと思えます。ご一緒に見学会に参加しませんか。

日・5月31日(日)

時・9時～17時頃

参加費・約1000円+

交通費実費

(丸木美術館入館料900円含む)

申込み・問合せ先(電話・fax)

042-478-3266(大山)

042-475-9359(大野)まで



東久留米「九条の会」 学習会—感想

3月28日に行われた『今日の中東問題と憲法』には、37名の参加がありました。分りにくい中東問題について、塚田先生のお話はわかりやすく、この問題を理解するのにとても勉強になりました。感想が寄せられますので、紹介します。

と友人から聞いていて、隣の西東京からの私も参加させてい
た
だ
く
と
思
い
ま
す。

●判りにくい中東問題のこと、地図も入ったお話によく理解
でき
ま
し
た。湾岸戦争の前に私
の同級生が2年間サウジに行っ
て
い
ま
し
た。帰国後いろいろお
聞
き
し
ま
し
た
が、現在のよう
な
混
乱
が
な
く、アラビアは行って
み
たい
所
だ
と
思
っ
て
い
ま
し
た。
「戦争」は破滅を招きますネ。

—安倍政権の進める「海外
での武力行使」「憲法9条
改正」に対してどのよう
に
お
考
え
で
す
か。—

●政治に無関心だった人たちが
安
倍
政
権
に
は
危
機
感
を
抱
い
て
い
ま
す。今こそ活動の時だとあら
た
め
て
思
い
ま
す。

●今、国会で続々と立法するの
を、九条の会の力で、市民の力
で
反
対
し
な
く
て
は
と
思
い
ま
す。

●この事はとんでもなく大変な
事
の
入
口
に
な
っ
て
し
ま
う
の
に、

国民（自分も含め）があまり関
心
が
な
い
事
が
大
不
安
!

●大量殺人への道をどうとす
る
安
倍
政
権
の
し
て
い
る
こ
と
に
絶
對
反
對
で
す。

●何か戦争をしないで外交的な
方
法
で、日本が孤立しない
で
や
っ
て
い
く、具体的な方策が
あ
っ
た
ら
教
え
て
貰
い
た
い
と
思
っ
て
今
日
期
待
し
て
や
っ
て
き
ま
し
た。安倍の岸からつながる右傾
化
に
は
反
對
で
す。



《平和を考える本》

『靖国の子』 山中恒・著



(大月書店)

「靖国の子」とは、戦没して
「靖国神社の神」とされた将兵
の遺族の子弟を指す。

『ボクラ少年国民』の作者でも
ある山中は、第二次世界大戦
当時は十四歳前後で、少年民
として生きることに何の疑い
も持たなかった。まして靖国
の子らは、靖国神社に祀られ
た父兄を誉れに思っ、後に
続
く
気
概
を
持
つ
こ
と
を
一
層
強
く
期
待
さ
れ
た
少
年
民
だ
つ
た。

尋常小学校修身書も子ども
の本も雑誌類も、大多数が、
戦争の正当性を語り、兵隊さ
んの勇ましい働きを書き立て
ていた。

八五歳になった作者は今、
膨大な資料をもとに「靖国の
子」の生まれた背景を検証し、
改めて言うのだ。「もう二度と、
靖国の子を登場させないでい
ただきたい!」と。(高田)